

閑話  
休題

## 国民学校から小学校に戻った頃

東京小諸会常務理事

須田 武久

それは、昭和20年（1945年）9月中旬のことだった。

第二国民学校の3年生だった私は、下り坂をルンルン気分で行校中、相生町の最上部と荒町との交差点で米軍車両の隊列に偶然出会い、今の三和地区側に立ってトラック群が走り去るのを呆然と見守るばかりだった。

その頃、木炭バスや牛馬車などしか見たことの無かった子供には、30台ほどの車両のいろいろな車型や車体の濃緑色とも驚きであった。ことに、初めて見る幌を張った小型車、のちにジープと言う名を知ったが、なんと格好イイ自動車、と思ったことか。

それらの車にはカーキの軍服に鉄兜姿の米兵たちが小銃を構えて乗っていた。

車両の隊列は未舗装の本町を下って国道に入り、上田、長野方面の駐留地に向かう途中だったのである。それから1ヶ月ほどの

ち、比較的短期間だったが、富士見町（現大手）にあった軍需工場の正門（現観光交流所横）に小銃を構えた米兵が立哨し、傍らに、通訳として小諸商業学校の満島教諭が付いていた。

昭和21年の春だったろうか、子供情報網で連絡があり、懐古園に駆けつけると日系の米兵がああジープに女性を同乗させて、あずま屋に乗り付けていた。既にたくさん町の町民が集まっており、女性と大げさな動きで談笑する米兵をこわごとと遠巻きに眺めていた。

TVの終戦記念番組などでジープを囲んだ子供たちが「ギブミーチョコレート」や「ガム」などと米兵にねだるシーンがあるが、怖くて、そんなことは出来なかった。

ちよつと時を戻すが、終戦直前には、第二国民学校に陸軍の通信隊が駐屯して体育館を占拠していた。また、近くの成就寺から集団疎開の生徒たちが隊列を組んで登校していたが、その

中に幼少時の作曲家小林亜星が居たことを後年知ることとなる。なお、今は市内となった南大井村に永六輔（孝雄）が疎開していたことも良く知られている。

昭和22年4月、「国民学校」は6年の歳月を経て戦前の呼び名「小学校」に戻った。

昭和23年の秋、学校帰りに相生町のある商店が店先にラジオを出しており、ガーガーと言う雑音とともに英語が聞こえたが、それは東京裁判の判決の放送であった。

戦中、戦後は応仁の乱（1476頃）の時のように、国を代表する文人墨客が都を離れて地方に疎開し、戦後もしばらく留まって地方文化の向上に多大の影響を及ぼした。

俳人高浜虚子は昭和19年9月、鎌倉から小諸の与良に疎開した。

当時、木材を扱っていた私の父は、薪納入の要請を人づてに受け、詳細を伺うために早速、虚子先生のお

宅を訪問のつもりが、住所の確認が若干甘かったため、お住まいが分からないというトラブルが起きた。

すぐご近所のはずなのに『最近、高浜虚子と言う俳句の大先生が疎開されて来たが、お宅をどこに存じですか？』と尋ねるもの、ご近所のオバサマたちは口々に『高浜虚子さんですか。さあ知りません。』父『いえ、虚子さんでなく虚子（ニキヨシ）先生です。』と何度か繰り返した。虚子の本名は「清々キヨシ」なのでオバサマたちの逆質問は偶然にも正しかったが、まるでTVコントのような話で、当初は、高浜虚子W h o ? の時代でもあった。

高浜虚子の疎開生活は、与良の小山家（小山清吾・東京小諸会副会長生家）が生活の周辺面を全面的に支えていたが、一時期、ご息女方の家族を含め、虚子一家の大半が近辺に疎開していた。ある時、疫病で重症のお孫さんを献身的に治療をした栗谷川医師に、のち

に弟子とし俳号を与えるなど、日常生活を共にしながらの指導が展開されていた。

疎開と言う異常な状況下ではあったが、結果として、高浜虚子は句作においても、小諸百句を残すなど自身の句歴に小諸時代を刻んだ3年余であったことは喜ばしい。

一方、後年、お弟子さんたちの尽力などが実を結び、平成12年、小諸高浜虚子記念館が開館し、寄託された自筆の軸、屏風などの句と書を味わうことが出来る。また、虚子・こもる全国俳句大会が毎年開催され、記念館は全国に向けて俳句の街・小諸を標榜する基地となっている。虚子はその後、俳人として初の文化勲章の受章者となった。

日本画の伊東深水是は、初和20年3月に児玉希望画伯との縁で東京府池上本町から小諸に疎開し、その後転居した大里村土屋邸から昭和22年暮れに懐古園横の現小諸義塾記念館の裏、古城

2丁日の旧児玉邸に戻った。

創作の傍ら、県展等の審査員を引き受けたり特別出品するなどの一方、現在の観光交流所、大手の旧大塚邸で作品4、5点のささやかな個展を開催し、大画伯がちょこんと椅子に掛けて観客待ちしていたことがあったが、地域に溶け込んでおられた姿が懐かしい。

その頃、私の父はある新興宗教に入会しており、会員宅持ち回りの勉強会らしきものを富士見町（現大手）の拙宅でも時折開催していた。

例会開催の日、深水夫人好子様は、毎回早めにおいでになり、炬燵で母の入れたお茶を召しあがっていた。小柄で楚楚とした姿の夫人がその例会で講話や討論に救いを求めたのは、小諸の静かすぎる生活の物足らなさを補うだけではなかったようだ。

伊東深水は鑄木清方に師事し、やがて江戸の肉筆画に磨きを加え、いわゆる現

代の「美人画」を完成させ、名声を得たのであった。

その間、好子夫人は芸妓を続けながら修行中の深水を支えた時期もあったと聞いている。深水にとっては若き日の好子夫人は得難いモデルでもあり、多数の作品を残している。

やがて人気画家となり、昭和の美女を生々しく描き続けるが、しかし、その糧となる華やかな生活を追い求めるあまり、深水は私生活でも火宅の人となっていた。

夫人はその間の苦しみの内を、拙宅で私の母に打ち明けられたとのことである。

深水は、その子供たちを描いて昭和25年に『姉弟』の題で発表、作品は平成13年、日本橋高島屋、平成23年、平塚市美術館の伊東深水展で展示されている。

師深水に次いで日本芸術員会員となった白鳥映雪の作品を中心に、地元出身作家作品の展示や諸活動の拠点として、小諸高原美術館・

白鳥映雪館が平成10年に開館し、その翌11年、伊東深水展が開催された。

会期中のある夕暮れ、映雪は師の作品を1点ごとに丹念に鑑賞していたが、私の問いに答え「賑やかなところが好きな人でしたな」と師を懐かしんでおられた。伊東深水を表現する高弟のひとつであった。

あの頃、赤坂の上り口に小諸劇場があり、空襲で焼失した歌舞伎座が昭和25年に再興するまで、のちに初代猿翁となる市川猿之助をはじめ、東京歌舞伎の大名板一行による1日か2日の旅興行が度々あった。夜の

外風の吹き込む粗末な小屋で布の背景を背に芝居を演じ、翌日、一行は上野へ帰って行った。食糧事情の悪かった22、23年頃まではホームで、鼠脰筋から贈られた小振りの味噌樽や米の入った袋などを自ら大物役者たちが手に下げて列車を待つっており、駅のご近所さんたちは柵越しに彼らを飽きずに眺めていた。

校名が坂の上小学校に戻った頃、下校時に、愛妻マリールイズ様と二人でゼスチャーたつぷりに話しながら相生町を歩く洋画家小山敬三を幾たびかお見掛けした。夫妻の疎開先は、昭和19年秋、茅ヶ崎からまず小諸（御牧が原）へ、のちに軽井沢へと移った。

時々立ち寄る生家と小諸駅経由の軽井沢への往復の途中だったのだろう。欧米人を見掛けることが無かった時代、フランス出身の奥様はまぶしく映ったものだ。また夫人が夫に『ケイゾウ』と呼びかけると聞いて、女性が男性をファーストネームを呼ぶ習慣を知らない田舎人には『ほんとうですか。』と驚きを感じておられた。

昭和55年、日本橋高島屋での個展で、画家の甥、小山庫荷様様の口添えで画集のポर्टレートにフルネームの漢字署名をしていた。今回、生家から未公開の油彩が6点発見され、今夏、小諸の「小山敬三美術館」で公開された。署名は無く、制作年、題名も不明ながら、嬢捨の棚田、那智勝浦の海岸などが生き生きと描かれた佳作であった。

疎開中、主テーマにした浅間山をはじめ、白鷺城、北京、フランス等得意の画題は多いが、愛妻を亡くした晩年、命懸けで描いたとされるグランドプリンスホテル新高輪の『紅浅間』は浅間山の集大成の作品で、その迫力に圧倒される。故郷小諸に、同じく文化勲章受章者の村野藤吾設計の瀟洒な「小山敬三美術館」を私費で建て、多数の作品と共に市に寄贈して逝かれたが、この美術館も毎日新聞文化賞を受賞するなど建築家村野の代表作のひとつであり、今、美術の街・小諸の象徴となっている。美術館完成と同年の昭和50年、画伯は文化勲章を受章した。私ごとながら昭和56年、勤務先で、令嬢蓉子様のご主人、中島様と同じ事業部に所属し、毎日お目に掛かる会社生活が1年ほど続いたことがあった。戦中、戦後のある期間、小諸―上野間は鉄路で約8時間を要し、東京、中央は遠いところであったし、情報伝達のメディアも乏しかったことを思いだした。従って、疎開などを機に、ここに記せなかった方々を含め各分野の達人から、文芸、美術を直接指導、伝達されたことは幸運であった。しかし巨匠たちは世の中が落ち着くにつれて、逐一、中央に戻って行き、そんな昭和中期（1940、50年代）の懐かしい、良き時代は終わった。生誕140年を迎える文豪島崎藤村がこの地で作家活動を開始した文学に加え、終戦から70年を経て、俳句、文学に絵画にと小諸は文芸、芸術の街として歩んでいる。（文中、巨匠、達人方の敬称を略した。）

## 野球の記憶

東京小諸会 常務理事 小山 平六

テレビのゴルフ中継はよく観るが、最近のプロ野球はつまらないので、ほとんど観ない。しかし、子供のころは野球が好きで、遊びの中心は野球でした。キャッチボールをしたり、野岸小学校や小諸高校の校庭で友達や近所の人たちと草野球に熱中した。

高校野球も好きでした。同級生のK君とN君と3人で、弁当持参で、汽車で上田へ出掛け、上田球場で行われた東信地区予選を観戦したことも何度かあった。地元の小諸商業を応援していた。

当時、上田松尾の監督は、中京商業を夏・春連続優勝させ、その後「小さな大投手」光沢毅がいた飯田長姫を春の選抜で優勝させたことで有名な木村監督であった。

N君の末兄さんが上田松尾へ通っていたので、N君は上田松尾の情報に詳しく、例えば木村監督は3ヶ年計画で甲子園を目指すチーム作りをしていること、またキャッチャーフライをあげるのが上手だということなどを教えてくれた。

試合前のシートノックは最後にキャッチャーフライで終わるが、N君のいう通り、

そのボールは垂直に真っ直ぐ上がり、捕手はホームベース付近からほとんど動くことなく捕球できた。

昭和32年の夏、上田松尾が甲子園初出場を決めたので、大変興奮した。そのうち、甲子園へ応援団を送るための寄付金集めの人が家にやってきた。父と長兄は上田中学を卒業しており、私のすぐ上の兄も上田松尾の卒業生でした。また伯父達のなかにも上田中学にお世話になった者が何人かいたので「我家もいくらか寄付をしなければならぬだろう」と父と長兄が話し合っていたことを覚えている。

上田松尾はクジ運に恵まれ、1回戦は不戦勝で、2回戦で前年度優勝校の古豪、平安高校と対戦。家中でラジオの実況放送に耳を澄ませて応援した。小諸出身の神津投手が力投し、手塚左翼手のファインプレー、また打線の活躍もあり、見事、平安に勝ってしまった。大金星。当時は出場校が少ないため、1回戦不戦勝で2回戦に1回勝っただけでベストエイトになった。初出場校でベストエイト進出とはすごいものでし

た。

準決勝は、8月のお盆も終わりの、夏休みも残りわずかな頃だった。午前中の試合のため、朝からラジオの前に陣取り、応援したが、残念ながら相手が広島商業では強すぎて完敗だった。その広島商業は最後まで勝ち進み、その夏の優勝校になった。

「前年の優勝校平安に勝ち、今年の優勝校広島に敗れたのだから、上田松尾は優勝こそ逃したが、2番目に強いのだ」と変な理屈の冗談を言う人もおりました。

それでも上田松尾の活躍のお陰で、しばらくはその話題で随分盛り上がった。

夏も過ぎ、秋のある日、父が「おい、平六、早慶戦を見に行くぞ」と言いだした。突然のことで驚きましたが、東京六大学が見られるなんて又とないチャンスでした。早速、父に連れられ汽車に乗り上京し、その日は練馬にある次兄の家に1泊した。早慶戦の入場券を持っていませんでしたが、翌日、神宮球場に行く前に父に連れられる

まま、下落合の桜井弥一郎さんのお宅を訪ねました。桜井弥一郎さんは、南佐久の桜井村のご出身で上田中学から慶應へ行かれ、豪腕で鳴らした大投手です。第1回の早慶戦（明治36年）のピッチャーであり、

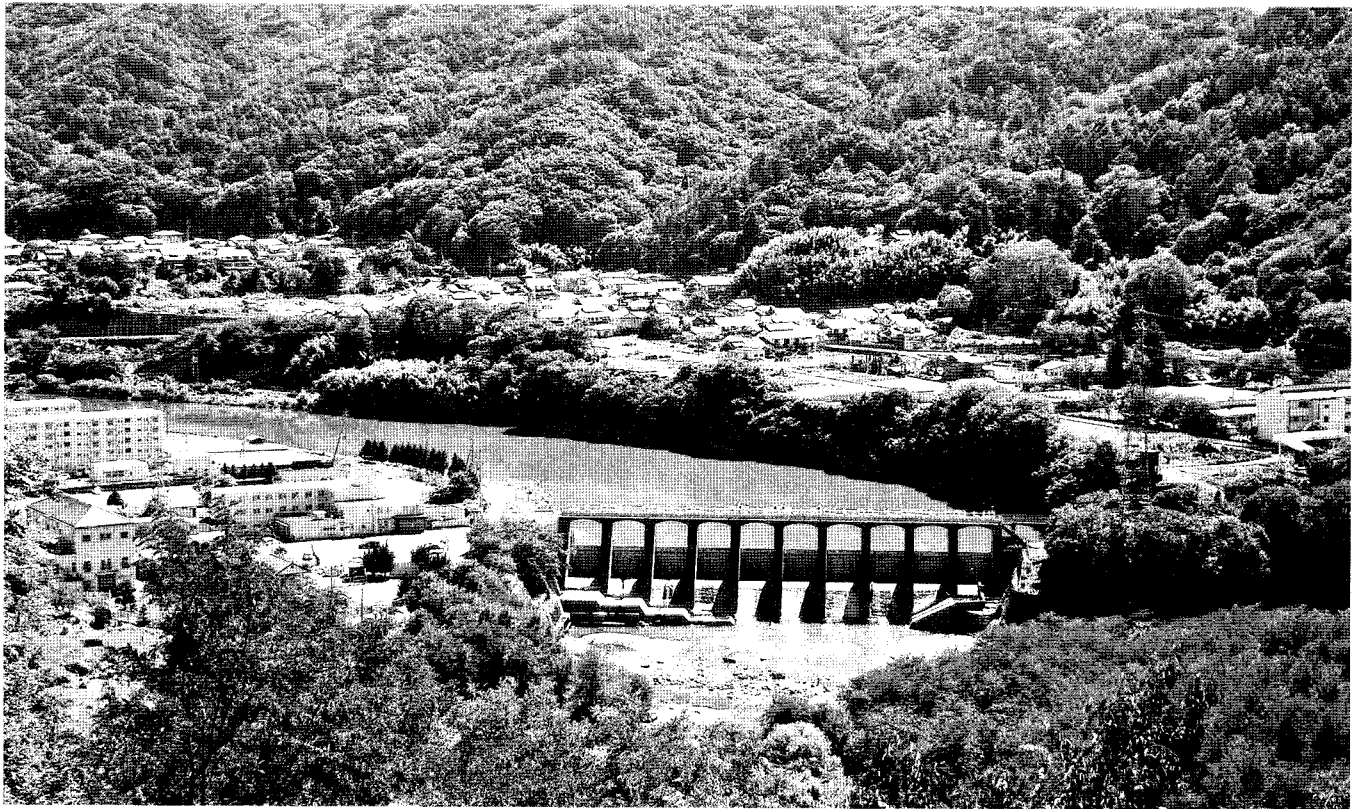
野球の早慶時代を築いた方でした。野球界に貢献したことにより野球殿堂入りを果たされております。

弥一郎さんは当時、病氣療養中のため、大きな体をベッドに横たえておられました。奥様とお嬢さんが付き添っておられました。我々がお邪魔したので、ベッドを半分くらい起こして、お話しをされました。

父が「ところで、今日の早慶戦のネット裏の切符がほしいのですが・・・」と切り出しました。「栄ちゃん、そんなこと言っちゃって、いい席はとつきの昔になくなっちゃっているよ。そういうことは早めに言ってもらわないと・・・」栄ちゃんというのは私の父の名前が（栄一）だからです。弥一郎さんは父より10歳ほど年上ですが、どういわけか、父と旧知の仲だったのです。弥一郎さんもほとんど困ったものだと思うけれど、お嬢さんに隣の部屋からなにか持ってくるよう指示されました。

しばらくの間、弥一郎さんと父は世間話をしていましたが、黙っていればいいものを、話の途中で「ところで、こいつ（私のこと）は野球に詳しく、汽車の中で『ホームランボールはもらえる』なんてことを話しておりました」と父が言いました。「プ

## 懐古園 展望台から千曲川を望む



2012年8月22日撮影

口野球ではもらえるが、学生野球ではもらえません」と弥一郎さんがおっしゃいました。私は非常に恥ずかしく、なんで、父はそんな余計な話をするのかと腹立たしいやら、恥ずかしいやら、大変複雑な思いをさせられました。

しばらくしてお嬢さんがなにかを持って戻ってこられました。それは当日の外野席券2枚でした。それを頂戴して弥一郎さんのお宅を辞去し、一路、神宮球場へ向かいました。

既に場内の喚声が球場の外まで聞こえており、試合は既に始まっていた。心がせきました。当時、私は特に理由はありませんが、なんとなく、慶応を応援していました。父は早稲田ファンでした。そのため、神宮球場へ着くと躊躇なくライト側スタンド（早稲田側）へ入場しました。（弥一郎さんに頂いた券なのに、早稲田側に入ることに私は多少良心がとがめましたが・・・）

その昔、父は上田中学を卒業した後、早稲田へ行ったかったようです。ところが、大切な家の後継ぎである孫（父）が都会に出て、華やかな都会の風潮に染まり、軟弱な青年になってしまい、「田舎は嫌だ、農家は嫌だ」などと家に戻らなくなってしまう

うことを心配した父の祖父が反対したため、早稲田行きは実現しませんでした。その後遺症が早稲田野球ファンの父を作ったのだと思う。

早稲田には主砲の森徹、慶応には左腕の巽という投手などがおり、結果は早稲田が勝ったかと思えます。

早慶戦終了後、引き続き閉会式に移った。シーズン優勝した立教を先頭に六大学の選手たちがダイヤモンドを一周し、ホームプレートを中心に6列に並んだ。秋の夕日が眩しく、逆光となるライトスタンドからは一人ひとりの選手を見分けることはできなかったが、あの集団のなかに、立教三羽ガラスの長嶋、杉浦、本屋敷もいるのか、と思っただけで見ていた。砂押監督のスパルタ式特訓で鍛えられた立教は強く、立教の黄金時代だった。彼らの最後のシーズンの閉会式に居合わせることができたことは幸運であった。

以上

